

愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立趣意書

東亜同文書院は一九〇一年、中国・上海に創立され、一九四五年敗戦による廃校までに約半世紀近い歴史をもつ。戦前海外に設けられた日本の高等教育機関としては最も古い歴史を有する。この経営母体は一八九八年設立された東亜同文会であり、当初近衛篤磨（当時貴族院議長）を会長とし、文化教育を通して日本、中国、朝鮮三国と提携し、アジアの平和を図ろうとした。その活動は、のちに、東亜同文書院（一九三九年大学となる）等の経営を中心とする教育研究によって代表されるようになった。

敗戦により東亜同文書院大学は廃校となり、東亜同文会も解散した。同校最後の学長であった本間喜一ら東亜同文書院大学の教職員が中心となり、同文書院大学はじめ海外にあった大学から引揚げた学生達のために創立されたのが愛知大学である。初代学長は林毅陸（東亜同文会理事、枢密顧問官、前慶応義塾総長）、理事は本間喜一（東亜同文書院大学学長、本学二代、四代学長）、小岩井淨（東亜同文書院大学教授、本学三代学長）らであり、

創立時の教職員、学生は大半が東亜同文書院大学関係者で占められていた。愛知大学設立の基礎となった「霞山文庫」、日中文化交流の架け橋ともいふべき「中日大辞典」、両校関係者の努力の結果現存している「同文書院学籍簿」などは、東亜同文書院大学と愛知大学との関係を如実に示すものである。

愛知大学は、東亜同文書院大学とは別の法人であるが、同時に「同文書院を背景に持っているからこそこれだけの愛知大学ができた」（創立者本間喜一の談話）のである。その故にこそ、「同文書院の出身者にとっては、愛知大学はいわば母校的な存在であり、書院生の同窓会である社団法人「滬友会」とは親密な関係になる」（滬友会刊『東亜同文書院大学史』より）のであり、また愛知大学にとっても、東亜同文書院大学は生みの親ともいふべき存在といえる。現在、東亜同文会を継承する霞山会とは、理事の相互就任をはじめ密接な関係があり、また一九九一年東亜同文書院記念基金会からは寄託を受け、昨年には孫文・辛亥革命と深い係わりをもつ山田良政・純三郎（ともに同文書院教員）関係資料の受け入れが実現するなど滬友会とも親密な関係がある。

愛知大学東亜同文書院大学記念センターの設立は、東亜同文書院大学の教育研究上の業績をあきらかにするとともに、「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する国際的視野と教養をもつ人材」（愛知大学設立趣意書より）の育成をめざす本学の今後の発展に寄与しようとするものである。

一九九三年五月三十日